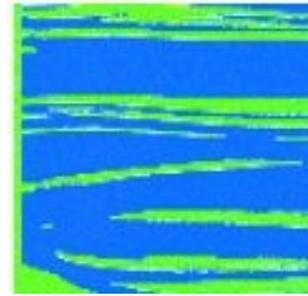


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2015年 冬号 No.81 (2016年2月1日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイスで学ぶオペラント実験装置の自作入門： 開催記	吉岡 昌子・佐藤 敬子・藤 健一
行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイスで学ぶオペラント実験装置の自作入門： 参加記 (1)	大屋 藍子
行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイスで学ぶオペラント実験装置の自作入門： 参加記 (2)	小幡 知史
連載：行動分析学の道にはいった理由 (1) 「まにまにのまにまに～“随伴性とは縁である”に導かれ ～」	野菜さらだ (三田地 真実)
連載：いま、こんな研究しています (17) 「水族館でのイルカ研究」	陳 香純
連載：いま、こんな研究会しています (9) 「とある研究会のはなし」	藤巻 峻
編集後記	ニューズレター編集部

行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイス で学ぶオペラント実験装置の自作入門：開催記

吉岡昌子 (愛知大学)・佐藤敬子 (香川大学)・藤 健一 (立命館大学)

2015年11月29日(日)に立命館大学朱雀キャンパスにて10:00~17:00まで標記のワークショップを開催しました。今回使ったのは、Arduinoという電子工作キットです。電子工作というと、はんだ付けや特別な工具を要して、初心者が容易に入りにくいイメージをもたれることが多いと思います。しかし、Arduinoは「ま

ずいじる」行動を強化しようという発想がもとにあり、最初の段階でははんだ付けや工具は不要です。キットとパソコンを用意すればテキストやウェブ上の情報をもとに、様々な電子回路を制御することができます。ワークショップでは、最初にArduinoのシステムに関する説明を行った後、いくつかの課題(マイコンボードに

配置した LED を 1 秒おきに点滅させる、タクトスイッチを押すと LED が点灯するなど）で回路の配置や Arduino 言語および Processing 言語によるプログラムの記述を体験し、最後はパソコンのマイクで拾った音の大小によって、LED の光の明るさが変わる装置を作りました。

ワークショップには 12 名の方が参加され、その関心をお聞きすると Arduino による動物のオペラント実験システムの構築、人のオペラント実験、臨床場面、生理測定での利用など様々でした。このあたりは、お二方の参加記により詳しく書かれています。Arduino はすでにスキナー箱の製作に用いられています（例えば、Pineño, 2014）。人のオペラント実験や支援の現場においても、こうしたデバイスを使うことで、対象とするオペラントやオペランダムの種類をより広げやすくなると思います。今回の目的は、主に装置製作の初心者の方に、研究実践の選択

肢として、Arduino のようなデバイスがあることを知ってもらおうということでした。実際に自分の発した声の音量に応じて LED の明るさが変わったりすると、参加者の方から「おー」という声が聞かれました。パソコンのプログラミングなどと比較すると、センサやワイヤなどモノを配置する電子回路は物理的に捉えやすいので、制御できたときの強化力も大きいのかもしれません。今後の時期はまだ決まっておりませんが、本ワークショップはシリーズものを計画しています。よろしければご参加ください。

引用文献

Pineño, O. (2014) ArduiPod box: A low-cost and open-source Skinner box using an iPod Touch and an Arduino microcontroller. *Behavior Research Methods*, 46, 196-205. doi: 10.3758/s13428-013-0367-5.

行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイス で学ぶオペラント実験装置の自作入門：参加記（1）

大屋 藍子（同志社大学 実証に基づく心理・社会的トリートメント研究センター（WEST）研究員）

2015 年 11 月 29 日、立命館大学朱雀キャンパスにて「行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイスで学ぶオペラント実験装置の自作入門」に参加しました。今回は、「Arduino」という電子工作キットを組み立て、プログラムを組み、反応の検出とそれに応じたフィードバックまで制作することができました。

私は、普段成人を対象とした実験を行っています。実験材料はパソコンを用いることが多く、VisualBasic 言語を使用した簡単なプログラムを組み込んで刺激の提示と反応の検出、強化を行いま

す。仮説で意図する行動を測定するためにどのような装置が最も適切なのか悩むことも多く、今回は、マンネリ化してしまった自分のパターンスキルと異なる新しいスキルが得られるのではないかと思い参加を決めました。私自身、Arduino を利用するのは初めてでした。ワークショップ前にインターネットで Arduino を検索してみると、基本的な説明から工作のレシピに至るまで、本当に様々なウェブページを見つけることができました。手に入れやすく、製作者同士でアイデアやサポートをシェアしているバリ

アフリーな環境なのだと感じます。ちなみに、VisualBasic のサポートページはプログラムに精通している人向けの説明が多く、つい悩ましく感じるのですが、Arduino は専門外の人向けにも解説しているページが多いように思うので、自力でチャレンジしやすいかもしれません。

ワークショップでは、Arduino の具体的な制作を体験し、Processing というグラフィックのプログラミングと合わせて実験装置を製作しました。Arduino も Processing もプログラムコードを記述するのですが、VisualBasic で記述するコードと似た構造であったため、理解しやすかったです。一方、新しさを感じたのは、簡単に複雑な入出力を実現できる点でした。これまで、私が実験装置を製作する際には、入力はキー押しやマウスクリックのようにパソコンへの反応を利用してきました。また、フィードバック方法は得点や画像の提示のみでした。しかし、今回学んだ Arduino は、マイコンボードに該当する部品を接続するだけで、光や音といった、より複雑な刺

激による入力とフィードバックが可能でした。今回特に興味を持ったのは、パソコンマイクの前で出した音の強弱によって、マイコンボードについての LED ライトの明暗が変化する装置です。こうした、人が感覚的に反応でき、感覚的にフィードバックを受けることができる装置の製作は、とても新鮮な体験でした。確かに、自分が画面に話しかけた音程や音量によって画面の様子が変化すれば、よりはっきりと話すようになるかもしれません。スマートフォン等で見かけそうなそれを自分で制作できるなら、実験装置のアイデアの幅だって広がりそうに思います。

ワークショップの帰り道、私はその足で書店に寄りお勧めされた書籍を購入しました。現在は慣れるためにちょこちょこ Processing で遊んでいる段階です。次回のワークショップが開催されれば、ぜひ参加しようと思っています。貴重な機会をありがとうございました。

行動工学ワークショップ#1 インタラクティブデバイス で学ぶオペラント実験装置の自作入門：参加記（2）

小幡知史（常磐大学大学院人間科学研究科）

「栄枯盛衰は世の習い」という言葉があります。我が母校である常磐大学の動物心理学実験棟は、まさにこの言葉通りの状況にさらされております。かつての大先輩が構築した Apple II e を中心としたオペラント実験箱などの実験装置は老朽化により故障の嵐、直そうにも恩師の森山哲美教授以外には操作すらままならないといった有様です。そのような動物心理学実験棟の絶体絶命の危機の中、今回の「行動工学ワークショップ」開催のお知らせがありました。森

山先生の勧めもあり、「渡りに船」とはまさにこのこととばかりに、お知らせのメールをくださってからきっかり 33 分後には参加の申込みをいたしました。

そのような経緯で、2015 年 11 月 29 日に立命館大学で開催された「行動工学ワークショップ」に参加させていただきました。しかし、ワークショップを受ける前は不安でいっぱいでした。なぜなら電子工作の「で」の字も分からない素人同然の私でしたので、「果たして理解できる

のか？」といった思いで開催校である立命館大学に着くまでは気が気ではありませんでした。しかし、本ワークショップでご紹介いただいたユーザーに極めて易しい設計の Arduino、なにより講師をしてくださった吉岡昌子先生、佐藤敬子先生、藤健一先生のご指導のおかげで、ワークショップでのメイン課題はほとんど苦もなくこなすことができました。

しかし、本当のゴールは、本ワークショップで学んだことを活かし、Arduino を用いた実験

装置を自作することです。そのためには諸先生方から教えていただいたことを契機とし、今後も様々な試行錯誤を通して、自作のオペラント実験箱を完成させることを目標にしていきたいと考えております。

最後に、このような非常に有益なワークショップを企画し、丁寧なご指導をしてくださった吉岡昌子先生、佐藤敬子先生、藤健一先生に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

<連載：行動分析学の道にはいった理由（1）>

まにまにのまにまに

～ “随伴性とは縁である” に導かれ～

野菜さらだ* (三田地真実)

なぜ、私が行動分析学を学ぶようになったのか、それはまさに「まにまにのまにまに」の所以としか言いようのない「随伴性」の導きによっています。

記憶を掘り起こしてみると、最初に私が「行動分析学」という学問分野に晒されたのは、大学院修士課程での故山口薫先生の授業ではなかったかと思います。この授業は、ビジュ先生「子どもの発達行動分析」をテキストとして進められ、毎回、各章の要約をレポートとして提出するというのが課題でした。初めて読む行動分析学の書籍でしたが、さっぱり内容がわからず大変苦勞してレポートを作成したという感じしか覚えていません。

また、当時山口先生は毎週土曜日に自閉症の子どもを対象とした臨床会も開催されており、授業と共にこの臨床会にも2年間ずっと参加していました。これは正直なところ、「私が望んで」ということではなく、山口先生の講座に入学した院生はなぜか全員必須参加であったためでした。私はピアジェの発達心理学を専門とされる先生の臨床会にも参加しており、二つの臨床会の進められ方の違いに随分戸惑い、どちらかと言えば、山口先生主催の方には反感を抱いていたほどでした。

「強化、強化って何だか動物訓練みたいじゃないか」、そんな風に感じ、時には山口先生にも

真正面から反発したようなこともあったと思います。今から考えれば、全く行動分析学の本質がわからないが故の戯言であったとこのような場で告白するのは恥ずかしいばかりです。しかし、あのかの経験があったからこそ、後に自分自身が行動分析学を人に伝える立場になったときに、「行動分析学を理解してくれない人、毛嫌いする人」の立場や気持ちになって、どのように説明すれば相手に正しくわかってもらえるだろうか？ と自分の言葉使いを吟味するようになったのではと思っています。

大学院は、最後まで行動分析学を「好き」になることはないまま修了しました。ところが、また次のご縁が私の人生に準備されていました。それは、言語聴覚士として勤めた埼玉医科大学の医局の先生が故茨木俊夫先生（元埼玉大学教授）の研究会に誘ってくださったことでした。研究会のメンバーは自閉症療育のエキスパートばかりで、毎週、勤務後に埼玉大学に集まって、JABAの論文を読んでいました。面白いことに、この会は新しく入って来た人と自己紹介というものせず、その人の人となりは、講読会で「どれだけ自分の意見を言えるか」で判断する（のだと私は理解していました）というユニークな場でした。この会に参加し始めた頃はまだまだ行動分析学に反発を抱いていた私は、何度か意見を戦わせる中で涙ぐんだりすることもありま

*事情により苗字が3つもすでにある身となってしまう、自分のアイデンティティがこんがらがっております。一番、自分のラベルとしてしっくりするものを使わせていただいております。

した。

しかし、行動分析学に反感を抱きながらも、この会を辞めなかったのは、言い換えれば行動分析学を学ぶことを止めなかったのは、そこに居るメンバーが「素晴らしい臨床家」であると私の臨床家としての直感がそこはかとなく感じ取っており、「こういうメンバーが良いという学問は、何か良いところがあるのだろう。自分は今も行動分析学は好きではないけれども、もしかするとしっかり理解できていないのかもしれない。それに、つまみ食い位で勉強するのを止めるのではなく、しっかり理解してから徹底的に論理的に批判してやろう」そう思って、その研究会のディスカッションをテープ起こしまでして、皆の話を理解しようとしていました。

そして、私が行動分析学の道に「本格的に？」引っぱり込まれることになった大きなきっかけは、その頃にたまたま立ち寄ったどこかの書店で、これもたまたま手に取った「オペラント心理学入門」でした。それまでどうしても理解できなかった、「強化の原理」の本質がこの本を読むことでやっと理解できたのです。まさに目から鱗とはこのことでしょう。最初に行動分析学に出会ってから、おそらく5年以上の月日が経っていました。

その後、この研究会で出会った一番の暴れん坊と結婚、彼がアメリカのオレゴン大学に留学したいという希望から、渡米に踏み切ったのは30代前半でした。私もいつかはアメリカで言語聴覚の勉強をしたいと願っていたので、渡米には賛成でしたが、「オレゴン大学」というのは、彼が選び出して決めた大学でした。この大学が応用行動分析学のメッカであることは、私には余りピンとは来ていなかったように思います。しかし、実際に英語は母語ではない自分が言語聴覚の勉強を続けることには、相当困難な事情があり（学部から全部やり直す必要があるなど）、止む無く、「Special Education」を専攻にして大学院博士課程での学修をスタートしたという経緯もありました。蓋を開けてみれば、そこに

はロブ・ホーナー先生やリック・アルビン先生など JABA で見ていた、そうそうたる先生方がいらっしゃり、先生方の授業を取れるだけ取って必死に勉強するようになりました。そして、この時期に「自分の問題行動」を ABC フレームで分析してみたところ、自分が考えていたのは全く違う理由（原因）によって、その行動が維持されていたことに気づいたのです。この瞬間、遂に「行動分析学にやられた」と思いました。

さらに、このときにテキストとして出会った本が「問題行動解決支援ハンドブック」（2003年、学苑社から翻訳出版、近日、改訂版出版予定です）でした。「こんな本が日本にあれば、子どもたちが救われる！」そういう思いで、私の翻訳の仕事がスタートしたきっかけとなった一冊でした。どういう用語を使えば、同じ意味を日本の皆さんにも伝えることができるだろう？直訳ではなく、意識し過ぎず、日本の皆さんが読んでも同じ機能をもたらす訳文探しの作業は、「わかりやすく伝える」ということが信条になっていった私にはうってつけの仕事でした。

アメリカ留学を終えて、帰国後、再び「まにまにのご縁」がありました。星槎大学から、当時の学長であった山口薫先生と一緒にスクーリング授業を担当してもらいたいという依頼が舞い込んできたのです。「院生時代、あんなに反抗的だった私が、ご一緒に授業?!」とこの不思議な巡りあわせに自分としても驚きながら、今度は先生のカバン持ちをさせていただき気持ちでお受けしました。北は北海道から南は九州と、語義通り全国の学習センターでのスクーリングに先生の御供として伺いました。毎回、「罰の原理」の説明のときに、「私も三田地さんも“×1”ですけど」という冗談をおっしゃられていたのも懐かしい思い出となりました。

そして、次の大きなご縁は、星槎の二代目学長に、故佐藤方哉先生が着任されたことでした。このことが発表になったとき、「応用の山口先生、基礎の佐藤先生！」と、しみじみ私は行動

分析学のまにまにの波に漂う葉っぱのよう
だ・・・と感じ入りました。佐藤先生の「基礎
行動分析学」の授業にも一受講生として参加さ
せていただきました。また、懇親会の折にはこ
のお二人の先生に挟まれたスリーショットも撮
ってもらい、「学会で難しい質問をされたら、こ
の写真を見せよう」などと思ったものです。



山口先生、佐藤先生と

佐藤先生とのご縁をいただいたことで、
「Verbal Behavior」の講読会も始まり、いよいよ
これからスキナーの勉強を・・・と思っていた
矢先に、佐藤先生が不慮の事故でこの世を去
られました。その後、この勉強をどうやって続

けていこう・・・、指南してくださる先生はい
らっしゃらないか・・・、少しでもスキナーの
文章を解説してくださる先生はいらっしゃら
ないか・・・。荒波にのまれる葉の如くの気持ち
でしばらくの時期を過ごしました。この私の藁
にもすがる気持ちに応じてくださったのが、慶
應義塾大学の坂上貴之先生でした。現在は、
Verbal Behavior の講読会の仲間との、そして
坂上先生との講読会での毎回のディスカッショ
ンが私の学問的知的好奇心を最も刺激してもら
える場となっています。

最後に、このような「まにまに」に身を委ね
てここまで来た私ですが、今、行動分析学を学
ぶ徒として生涯賭けてやりたいと思っている野
望は、「教員養成課程」において行動分析学の基
礎を全員が学べるようにする、ということです。
このような思いに至るには、これまでに出会っ
た障害のある子どもを持つ保護者の方々のお話
によるところが大きいものですが、それはそれ
で長い話になりますので、また何かの機会があ
りますときに共有させていただければと思いま
す。同じ志を持つ方がいらっしゃいましたら、
どうぞ一緒に知恵を出し、そして行動してい
ただければと思っております。

<連載：いま、こんな研究しています（17）>

水族館でのイルカ研究

陳 香純（関西学院大学）

私は現在、水族館のご協力のもと飼育下にあるイルカの研究を行っています。もともとイルカに興味があったことありますが、学部3年生のときのゼミ合宿で村山司先生(東海大学)の著書を読んだことが、イルカ研究に足を踏み入れたきっかけとなりました。イルカはいわゆる「頭の良い動物」という考えを持っていましたが、実際には行動や社会性など未だ解明できていない動物であるということが本に書かれており、彼らがどんな動物なのか知りたいと思うようになりました。そこで、指導教員である中島定彦先生に相談し(イルカ研究がやりたいですと伝えたときの困り果てた先生のお姿は今でも忘れられません)、研究に理解を示してくださった飼育員さんを紹介して頂きました。

水族館と聞くと、皆さんはどんなことを考えるのでしょうか。華やかなイルカショーなどを思い浮かべる方が多いかもしれませんが、実際は調餌、掃除、健康チェック、事務作業などと分刻みのスケジュールで作業が行われています。来館者の対応も大事な業務で、水槽に物を投げ入れるなど困った来館者の対応にも追われてしまいます。来館者が釣ってきた魚が水槽に投げ入れられたという珍事件もあったそうです。朝から晩まで、当直の場合は明け方まで忙しい日々を送る飼育員さんですが、ここ最近、研究にも関心ある方が増えてきました。私が初めて出会った飼育員さんもその一人で、研究を行うには人員が足りない、どんな方法で進めるのかと悩んでいたそうです。

運良くイルカ研究を始めることができましたが、実験室での動物実験とは異なり全てが手探

りでした。まずは、イルカを識別する必要があり、ひたすら個体識別の日々を送っていました。はじめは、背びれの形や身体の傷を頼りに個体識別をしていたのですが、当然、傷は治りますし、新しい傷もできていきます。そのたびに振り出しに戻ることも数知れず…。今では顔でイルカを識別できる特技が身に付きました。また、実験室と違い、天候によってはイルカの様子が観察できず何日もデータが取れないこともしばしば。そして、実験に際しては飼育員さんにイルカを動かしてもらわなければならない、忙しい業務の合間を縫ってもらい対応してもらいます。このように、イルカを研究するには実験を始める前に様々な問題が山積みになっています。研究にお付き合い頂いている水族館の方々には本当に感謝している次第です。

そんななか、ようやく一つの研究をまとめることができました。水族館で飼育されているイルカは問題行動を示すことがあります。私が研究していた水族館ではバンドウイルカ(*Tursiops truncatus*)というイルカが食べた餌を吐き戻す、「吐き戻し行動」を行っていました。頻繁な吐き戻し行動は栄養失調や、餌に薬を混入させる投薬処置が困難になるなど、飼育下において好ましくない行動と捉えられています。この対処法として、多頭飼育を行う、水槽を移動する、遊具を投入するなどの処置が多く園館で行われていました。しかし、いずれも数量的なデータは取っておらず、効果の判断も飼育員へのアンケート調査によるものでした。そこで、2頭の雌バンドウイルカを対象に、遊具（フープ）導入による低減を試み、実際にデータを取って



観察中の様子。イルカもヒトを観察しています。

みることになりました(陳・神田・上野・友永・中島, 2015)。もともと対象となったイルカは遊具で遊ぶことが多く、遊具投入後は吐き戻しが減っている気がするとの飼育員さんの話もあり、遊具の投入を方法として採用しました。単一事例計画法を用いて、ベースライン期(A)の測定に引き続き、毎日の演技訓練(給餌を伴う)の直後にフープを30分間水槽に投入する介入期(B)を行ったところ、介入によって吐き戻し行動の回数が減少することが A 期と B 期の繰り返し手続きにより明らかとなりました。飼育員さんと試行錯誤のなかで始めたものでしたが、成果を

水族館に還元できて次の研究へ進む励みとなりました。

現在、動物愛護・保護の観点から水族館でのイルカ飼育に対して反対する意見が高まっており、海外ではイルカ飼育の禁止、飼育中の個体で飼育は終わるといった水族館も出てきました。なぜイルカだけ、ここまで反対されるのかといった疑問はありますが…。日本もイルカ飼育に対する風当たりが厳しくなり、水族館の存続そのものが大変な状況になっております。岐路に立たされている状況ですが、私は水族館で研究することによってイルカ飼育の意義を考えることができるのではないかと考えております。野生場面では研究できないことが飼育場面で調べることができる、また、その飼育場面で得られた成果を野生場面に還元することもできるのではないかというのが私の考えです。もちろん、まだまだ課題は残されていますが、学会員の皆様からもご助言を頂けますと幸いです。このニューズレターを最後まで読んでくださった皆様へ、心より感謝申し上げますとともに、いつもとは違った目線で水族館にお出かけになるきっかけになりましたら、とても嬉しく思います。

陳香純・神田幸司・上野友香・友永雅己・中島定彦 (2015). 遊具導入によるバンドウイルカ (*Tursiops truncatus*) の吐き戻し行動の低減. *Animal Behaviour and Management*, **51**, 87-94.

<連載：いま、こんな研究会しています（9）>

とある研究会のはなし

藤巻 峻（慶應義塾大学大学院・日本学術振興会）

あれはたしか、2012年に慶應義塾大学で行われた行動数理研究会の後、飲み会での出来事だったと思います。怖そうな人たちの前で初めての口頭発表を終え、ジョッキを片手に歓談しているときのことでした。「関東圏に住んでいる同世代の人たちで研究会とかやれたらいいですね。てか、やりましょうよ!」。こんなお誘いをくれたのが常磐大学の長谷川福子さんでした。

まあ社交辞令みたいなもんだろうと思っていましたが、それから数週間して福子さんから1通のメールが届きました。「この前の話ですが、本当にやりませんか?」この人なんかすごいパワフルだな、そこまで言われたらやるしかない。そんなこんなでその年の12月、芝浦にある常磐大学のキャンパスで第1回の研究会が開催されることになりました。第1回目参加者は、僕と長谷川福子さん、研究室を出るときに捕まえた後輩の松井大くん、この3人でした。

その後は慶應と常磐から徐々に参加者が増えていきました。学会などでもいろんな人に声をかけた結果、現在では慶應や常磐以外にも、筑波大学、帝京大学、明星大学、立教大学と、6つの大学から20名ほどの規模にまで発展しました。さて、昔話はこの辺りで終わりにして、一体どんな研究会なのかを紹介していこうと思います。どこで、いつ、誰が参加するようになったのかはあまり思い出せないです。

研究会の参加者は、いま述べたとおり関東圏の大学に通う学生がほとんどですが、学部2年生から後期博士課程の学生、さらにはポスドクまでいます。教員が1人もいないというのはこの研究会の特徴の1つかもしれません。参加者

の興味に関しても、基礎系、応用系の枠組みにとどまらず、カラスの研究をしている人までいます。基本的には来る者拒まず去る者追わずのスタンスなので、参加してみたいという方は fujimaki1026@gmail.com までご連絡ください。ちなみに参加費などは一切ありません。交通費は自費をお願いします。

開催する頻度は月に1回程度です。全員の予定があうことはまずないので、毎回の参加者は大体10名前後でおさまることが多いです。開催場所は、当初、慶應（三田）と常磐（水戸または芝浦）のキャンパスを交互に利用していました。しかし最近は全参加者にとって大体等しい距離にある慶應で行うことが多いです。2、3回に1回程度は、常磐大学や明星大学、筑波大学などで開催しています。初めて行く大学では、研究室を見学するというのが1つのイベントになっています。

この研究会で行っていることは、主に論文発表です。発表は15分で行い、質疑応答時間も15分設けています。行動分析学にどっぷりハマっている人もいれば、これから学んでいきたいという人もいる、あるいは行動分析学それでいいんですか?なんて思っている人もいる、そんな状態からスタートした研究会だったので、最初は「行動分析学研究」を片っ端から読んでいこうということになりました。この3年間で最新号付近まですでに発表し終わったため、新しく読み進めたい本を参加者から募り、最終的には以下の5冊を読んでいくことになりました。Behavior Analysis and Learning (Pierce & Cheney, 2013)、『応用行動分析学』（中野、

2013)、Radical Behaviorism for ABA Practitioners (Johnston, 2013)、Behavior Theory and Philosophy (Lattal & Chase, 2003)、Single-Case Intervention Research: Methodological and Statistical Advances (Kratochwill & Levin, 2014)。1冊を数名で分担して発表していくというスタイルです。読んでみたい、読まなくてはいけない、でも1人だと難しい。こういう難敵を相手にするとき、仲間を募って一緒に読み進んでいくというのは1つの知恵です。うまくいくかはわかりません。でも、個人的には楽しみです。こうした論文発表以外に、自身の研究発表を行うこともあります。例えば卒業論文や修士論文、学会発表や論文にした研究などを発表し合っています。卒論発表会の練習として、学部生が飛び入り参加することもありました。

この研究会では、あるお約束、というか、心がけのようなものが3つあります。1つ目は、「言いたいことが伝わる発表をすること」です。自分では言いたいことをわかりやすく発表したつもりでも、聞いている人には全然伝わってなかったという経験が、誰にでもあるのではないかと思います。その一方で、学会などで感動してしまうくらい本当に素晴らしい発表に出会うこともあります。こういう発表は真似したくても中々できません。気兼ねなく発表練習ができる場であることも、この研究会の特徴です。

2つ目は、「わからないことはわからないと言うこと」です。周りの人がみんな知っていることを自分が知らなかったとき、恥ずかしくてつい知っている風に振る舞ってしまうことがあります。いわゆる「知ったかぶり」というやつです。世の中には、「そんなことも知らないのか。勉強不足だねえ。」などと、馬鹿にしたように言ってくる人もいます。しかし、自分の知識をひけらかしたいだけの人間を気にして学ぶ機会を逸するよりも、わからないことはわからないと言って、より多くのことを学ぶほうが良いじゃ

ないですか。だから恥ずかしがらずに聞きましよう。そこで学ばばいいんですから。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥です。

3つ目は、「非難ではなく、良い批判をすること」です。研究を単に非難し、論駁して、得意然としている人を見かけることがあります。これはある意味で徹底的行動主義の強力さ故のダークサイドなのかもしれません。しかし行動分析学の世界には、非常に的確で鋭い批判をしてくれる人がたくさんいます。僕自身、そういう批判によって成長できたと感じるが多々あります。これはとてもありがたいことですし、自分自身も他者にとってそうでありたいと思えますが、なかなか難しいものです。ちなみに15分の質疑応答時間を設けているのはこのためです。たくさん考えてたくさん批判してみましようという意味を込めて。なお、質疑応答が15分以内に終わることは稀です。

ところで、研究会の後は何をしますか？という質問が来る前に答えておきますと、答えは当然、飲み会です。必ずどこかで飲みます。仲通り商店街が日曜日で閑散としていても、入れるお店を見つけて飲みます。学生たるもの皆お金がないのは常識なので、あまり値段が高くないところで飲みます。お酒と一緒にああでもないこうでもない議論することが、皆大好きなようです。飲み会だけ参加の方も大歓迎です。今年もたくさん飲みましよう。

最後に、これからこの研究会で実現させたい、ささやかな夢を語ることにします。現状は研究会というよりも勉強会という色合いが強く、仲間内でもそう呼び合っています。この研究会はいろんな立場の人がわりと頻繁に、そして自由に集まる場です。そんな貴重な場を利用して、共同研究や学会でシンポジウムなどをやりたい。それがこの研究会の当面の目標です。

「最近の若い人は元気ないからね。」こんなぼやきをときどき耳にします。まあ見ていてください。今にそんなぼやきは出なくなりますから。

編集後記

今回はじめてニューズレターの編集を担当させていただきました。無事に発行することができ、ひと安心しています。これもひとえに快く寄稿をしていただきました先生方のお力添えのお陰です。ここに改めて御礼申し上げます。また、本号から新たに『行動分析学の道にはいった理由』という連載を開始いたしました。「あの先生が行動分析学を志した理由をぜひ知りたい！」というご希望がありましたら、編集部までお知らせください。

さて、本号は前号から比較的短いインターバルで発行いたしました。このため何とか「冬号」を冬季のうちに発行することが出来ました。次号もできるだけ早く皆様にお届けできればと考えています。引き続き、皆様からのご寄稿をお待ちしています。

それでは、まだまだ寒い日が続きますが、お体にお気をつけてお過ごしください。(MK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25

日本大学大学院総合社会情報研究科

日本行動分析学会ニューズレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp